

六月二六日、米ホワイトハウスの
スポーツマンは、先頃レーガンが
シリアのアサド大統領に親書を送つ
たこと、近く米特使がシリアを訪問
する予定であることを発表した。翌
日、シリアの大統領スポーツマン
も、この二つの事実を確認した。
そして、七月六、七日の両日、米
国連大使ウォルターズがアサド大統
領と会談した。

米帝が、反シリア包囲網を敷き、
外交・経済制裁に出てから、約一年
の条件として、「テロリズム」に対

近いたとうとしている今、なぜ特使
を送りこんだのだろうか？ 五月中
旬のスターク号ミサイル被弾事件以
来、ガルフ戦争への軍事介入の野望
を明らかにしてきたレーガンは、
シリアに何を要求しているのか？
今月は、とくにこの問題に焦点をあ
ててみよう。

一 レーガンの四つの要求

レーガンは、シリアとの関係改善
ノンの右翼キリスト教徒地区に対する
シリアの支配の承認の条件として、
次の四つの要求を、シリアに提出して、
間のレバノン情勢が、この要求に沿

中東情勢の鍵を握るシリア

一九八七年七月一〇日

月刊
中東レポート

第26号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL. (03) 291-5533
編集 J.R.A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費20000円

目次

中東情勢の鍵を握るシリア	1
イスラエル政府の分解現状(資料①)	6
中東和平国際会議構想(資料②)	7
ブダペスト会議後のイスラエル共産党声明主旨(資料③)	7
PLOおよびアラファ特派の動き(資料④)	8
カイロ協定(抄)(資料⑤)	8
6・18合意(資料⑥)	9
激動の中東ドキュメント(1987年6月9日～7月10日)	10

う形で進行してきたのは事実である。つまり、シリアは、六月一日に、ダマスカスのファタハ革命評議会派の事務所を閉鎖し、同派同盟員のうちシリア旅券を所持していない者を追放した。

次に、六月一五日には、カイロ協定破棄、五・一七合意破棄レバノン国会決議に、ジエマイエル大統領、ホス首相代行が署名し、レバノン国家としての正式破棄手続きが完了している。

そして、米人人質問題では、六月中旬に新たに人質になつたグラス記者釈放にむけ、努力を強化してきた。

七月初旬には、バール・ベックのハビッラー拠点包囲にむけ、二五〇〇人のヨーマンド部隊を派遣したとの情報が流れた。外国人人質が、レバノン・シリアートルコ経由イラン外交官車でイランに移送されたとの報道があつた後、レバノンへ出入りするイラン外交官車、イラン革命防衛軍者関連の移動制限を行い、ベイルートにおいても、ハビッラーのリーダー達との接触を重ねたとされているが、これも、シリアの努力を示している。

最後の点に関しては、東ベイルートへのシリア軍の進駐と交換に、イ

ていること。さらにファシスト・トルコとも関係改善を行つていて。一言で言うなら、善隣外交・安定化路線である。

こうした動きから、シリアが戦略転換したとするのは、早急すぎるだろ。シリア自身は、アサド政権の誕生以来、アラブ反動・帝国主義と自らの反帝民族主義の立場のバランスをとりつつ、シリアの戦略目標であるイスラエルとの戦略均衡をめざしてきた。むじろ、国内経済の困難から、そして、レバノン、ガルフ戦争での孤立化から資源を持たずに戦争状態を続けていた困難に加え、ECによる経済制裁が打撃を与えた。

そこで、反帝の枠を崩さないレベルで、柔軟な戦術展開をすることによって孤立化をうち破り、経済安定化の条件を作り出すことに中心をおいている。

帝の介入阻止、そして人質解放を計ることとして米帝との関係改善を計ることが重要であつたろう。

チャーレズ・グラス誘拐は、こうしたシリアの安定化政策に真向うから反対するものであった。それは、ハジビッラー等に対して、シリアはこれまで直接的な力による対決を避けつつ人質問題解決に努力してきたが、シリアに新たな決意を迫ることになったのである。イラン外交官、イラジ革命防衛軍の活動制限、ハジビッラーに対する制限という形に、それが表われている。

こうじて、イランとの関係に対し、矛盾しつつも、決定的な対立にもちこまないで、一方においては、ヨルダンを仲介とするイラクとの関係改善とのバランスの中で、双方を牽制しつづ、自己の利益の実現を計っている。その利益とは、一方において、外国人人質問題、ガルフ戦争におけるシリアの役割を示すことによつて、米帝、アラブ反動諸国を牽引して、他方においては、イラクとの関係改善の動きによつて、イランに停戦をのませるための制裁をも牽引していくことである。

現在、米帝等を中心に、ガルフにおける軍事力増強を計ると同時に、イランに停戦をのませるための制裁

四 今後の情勢の動向

つき国連停戦案を準備している。また、ソ連は、自らがガルフでの軍事的である存在をひき上げることによって、ガルフの緊張緩和を行っている。

米帝が軍事力増強・緊張激化という展開をしているのとは対象的である。こうしたソ連の緊張緩和は、緊張激化を恐れているU A E等のガルフ諸国を米帝との政治的矛盾にむかわせようというものである。

イランは、こうした状況の中で、米帝・イラクとの対峙を強化しつつ停戦へむけたシリア等の圧力の中で停戦条件を低くしてきている。サッダム・フセイン政権を辞めさせることまで停戦受諾条件に含めていたのから、イラクが侵略者であるという規定を含めば、停戦をのむという方向になってきている。米帝・アラブ反動は、イランに停戦をのませるために、シリアの役割に期待をかけるをえない構造になっている。

四 今後の情勢の動向

シリアが展開している安定化へかけた再編は、現在の中東情勢全般に大きな影響を与えていている。同時に、この安定化再編が、さまざまな矛盾をはらんでいることをみてきた。とくに、レバノン内では、アマル

主導の再編か、再びキャンプ戦争をひきおこして、それに対抗するのかという分解を生む要素になつてゐる。それは、U L Fとしての統一をも破壊していく要素として作用し、シリアとパレスチナ勢力の関係のさらなる悪化をうむ要因となつていくことが、容易に予想される。

また、中東和平の問題においてもシリアの動向が、全体を左右していくだろう。とくに、現在のヨルダンの動きに対して、シリアがどういう態度をとるのが注目される。中東和平国際会議ということにおいては内容はともあれ、シリアは反対はないだろう。しかし、現在の状況において、ヨルダンが、対イスラエル直接交渉への道を開くために動いていることに対して、シリアは、明らかに、それを牽制しようとしている。ヨルダン自身、イスラエルとの単独・直接交渉から得るもののが少ないということを知つており、ソ連の後楯をうけているシリアとの協調をてこに、対米交渉を有利に展開することを狙つているのである。

ここで問題になるのは、パレスチナ革命の扱いである。アラファト派は、P L Oぬきの中東和平国際会議が進行してしまうことに危機感を抱

現在は、イラク、エジプトとの関係を軸に展開しているのである。中東和平という政治面での相違は、それほど決定的なものではないが、レバノン問題における利益の対立は、シリアルとPLO関係の決定的要素となっている。したがって、シリアとPLO総体との和解は、まだ遠いと考えなければならない。シリア自身の利益からは、中東和平国際会議にPLOが参加するか否かは、大きな問題ではなくなつており、シリアぬきの国際会議が進行することを恐れている。

ガルフ戦争においては、停戦は困難である。なぜなら、国連制裁措置としての双方への武器禁輸の問題も、イランは、これまでも実質的な禁輸状態の中で闘つてきたし、それゆえに、イスラエル・米帝との取引も行つてきたこと（「イラン・ゲート」の件）から言えば、イランに停戦を迫るものとは言い難い。イランへの圧力という点では、ソ連も直接伊朗への影響力を持つているわけではなく、シリアル自身は、停戦というよりも、現在の状況の中でのバランスをとることによって利益をえている。したがって、シリアルも、戦争状態終

現レベルで展開しようとするPLOに対し、PFLPは反帝民族主義の政策で牽制しようとしており、そうしたPFLPの立場をシリアは承認している。

次に、レバノン右翼である。こうしたシリアと米帝の関係改善によつて立場を失うマロン派キリスト教徒に対し、駐ベイルート米大使は、ジエマイエル大統領に、「レバノン問題に対する米国の立場は変わらない」とシリアと米国の関係改善は時間がかかるし、一朝一夕にはいかないと説明した。これは、シリア・レバノン関係改善、その影響を憂慮するキリスト教勢力に対する米帝の側からの気遣いであり、それが、より明確に、米帝—シリア関係改善がレバノン右翼に与える影響の深刻さを示すものである。シリアの現実路線をみても元大統領経験者を中心としたマロン派の伝統的指導部は、シリア・米帝の関係改善の流れに従っていくことになるだろう。現在最も親米となるシャムーンは、息子のダニーを次期大統領に立てている。既得権益が根本的に犯されない限り、そして、完全に破壊されかかっているレバノン経済の再建のためにも、もし安定

化が実現するなら、伝統的指導部は大きな異論はない」とされる。けれども、新興勢力である L.F のジャジャは、大反対である。なぜなら、彼こそは、イスラエルと深く連携し、統一レバノンではなく、L.F 支配地区のカントン化に利益を見出しており、カントン化の中でマロン派内の権力を独占しようとしているからである。貫して、「シリア軍のレバノンから出て行け」と主張し、東ベイルートを軍事制圧し、「独立政府樹立」策動を進め、シリア軍の東ベイルート進駐に一番強く反対している。

ざるをえない構造である。シリアとしては、レバノンの安定化をこれまでのイスラム左派勢力を再編することにより、右翼との政治解決の条件を作ろうとしている。アマルの下に統合し、政治勢力を再編する事により、右翼との政治解決の条件を作ろうとしている。アマルは、レバノン政治の中では、新興勢力であり、マロン派キリスト教徒スンニ派イスラム、ドルーズ等旧来の政治勢力とは違って、自己の支配地域、権益をもたなかつた。その分宗派政治改革の中で、最大の利益を得るのは、アマルということになるさらに、その軍事力と合わせて、旧来の政治勢力とは矛盾せざるをえない。

実際のところ、ULFの正式結成は、まったく行われていない。対右翼政治解決を主張するアマルに対しドルーズは軍事対決を主張し、双方の思惑の相違をみせている。

次に、ガルフ戦への影響である。イランとシリアの関係は、イラン革命勝利以来、イラン革命の反帝を支持し、また、革命成立と同時にイランからかけられたガルフ戦争に反対して、シリアは、一貫してイランの立場を支持してきた。この立場は反帝の共通性、そして、イラクのサダメ・フセイン政権への対抗上

もあった。イラクは、同政権成立以来、親米反動化を強め、反帝進歩の立場に立つシリアに敵対してきた。しかし、このイランとの関係も、昨年来石油代金支払い問題をめぐり矛盾が生じてきた。このためシリアは、イランへの牽制として、イラクとの関係改善を持ち出し、経済問題でのイランへの圧力として、利用してきたのである。また、今年初め、イランがバスマ市に大攻勢をかけた時も、シリアは反対した。イランによるアラブ領土占領に対しても、断固反対することを明確にしてきている。

また、レバノンにおける外国人人質問題は、その大半が、イランの権益と結びついたものであり、イランがレバノンにおける影響力を拡大していくことは、シリア主導のレバノン安定化と相矛盾するものである。レバノンで、明確にイランの権益の下に動いているのが、ハジビックラーである。今年の二月、シリアが西ベイルートに介入したもう一つの根拠（ミリシア間の抗争抑止の他）には、人質拉致が多発し、米帝の直接介入の危険性が増大してきたことにあるだろう。レバノン安定化を計るには、人質問題の多発を阻止し、米

一、アラファート議長、チュニスにて
在米ユダヤ人代表団と会談
五月三〇日～六月六日
代表団の中の人が語るには、P
LOは、パレスチナの大義を放棄
しておらず、暴力放棄もしていない
ことを確認したこと。
二、イスラエル進歩勢力代表団との
ブダペスト会議に、代表団派遣。
六月八日～六月一二日
三、バグダッドにてPLO執行委員
会

六月一六日～一八日
この会議での議題は次のものと
された。
① レバノン問題
カイロ協定破棄問題、キャンプ
問題
② 被占領地情勢
国際会議問題
③ シリア、ヨルダン、エジプト
との関係について
当初三日間予定の会議は、二日
でうち切りになり、予定された声
明も出なかつた。討議は、シリア、
レバノン代表団長
エミール・ブスターニー
パレスチナ代表団長
ヤセル・アラファト

（この合意は、レバノン国会にも
示されず、ある新聞が前出部分を
暴露したので、内容が知られるに至
つたとされる。中心は、対イスラエ
ル交戦権、武装権の確認であろう。
——編注）

六・一八合意

資料⑥

者は、レバノンの主権および安全が
課す限度内において、武装闘争によ
つてパレスチナ革命に参加すること
が許される。
④ 「パレスチナ武装闘争」が、パ
レスチナ革命と全アラブの利益は元
より、レバノンの利益のために行動
するとの確認。
⑤ この協定は最高機密であり、司
令部のみが把握する。

ド政策を拡大してパレスチナの大義
を抹殺せんとする全ての試みに対決
し、ペイルートにおけるレバノン・
パレスチナ同朋間の流血情況に終止
符をうつために、アマル・L N D F
(レバノン民族民主戦線)・P N S
F(パレスチナ民族救済戦線)は次
の点に合意した。
(一) 停戦の遵守
全ての急襲活動をやめ、戦闘地域
での武装した姿をやめ、負傷者を救
出し、ペイルートの(パレスチナ)
キャンプで人道的諸組織に人道的任
務遂行をさせる。
(二) アマルと(レバノン軍)第六
旅団は、戦闘開始前の任務
にもどること。
(三) 第六旅団は、戦闘開始前の任
務にもどること。
(四) 全ての釈放された捕虜、疎開
した人々はキャンプや自分の元の位
置にもどる。彼らの損害回復を助け
ること。
(五) 和解へむけた人民セミナーを
開催する。これはレバノン・パレス
チナ両人民の憤激その他のわだかま
りを止揚するため。
(六) 在ペイルートキャンプの治安
維持はペイルート治安維持の一部で
ある。ダマスカス開催のイスラム会
議と対決し、キヤンプデービック
ノンの統一を脅かし、レバノンの國
家的(民族的)役割を抹殺せんとす
る陰謀と対決し、キヤンプデービック
敵陣営の目標と対決し、敵シオニ
ストに対決する同盟を確立し、レバ
ノンの統一を脅かし、レバノンの國
家的(民族的)役割を抹殺せんとす
る陰謀と対決し、キヤンプデービック

議で設置された治安維持委員会は、
キャンプを含むペイルート治安維持
計画を作り、同計画はP N S Fとも
討議せねばならない。国内治安維持
軍(I S F)がキャンプ内での治安
維持をつかさどりI S Fが各キャン
プ内に警察署を設置する。
(七) ペイルート以外のレバノンの
地区の治安維持計画、または大ペイ
ルートもしくは他の地域の治安維持
計画、または他の計画を提起した時
にはパレスチナキャンプは他のレバ
ノンの地域と同じように扱われるし、
パレスチナ人もレバノン人と同じ
法・各处置が適用される。
(八) レバノンの諸勢力が合意した
治安維持計画、またはレバノン政府
が決定した治安維持計画による部分
は、または包括的な武器接收が開始
されるまで、重火器、中火器は共同
連携委員会の監督下、ペイルートの
キャンプ外にだすこと。

(九) この共同連携委員会には、ア
マル・L N D F・P N S Fが入り、
シリアがオブザーバーを一名派遣す
る。同委の任務は、治安・社会・政
治的な連携をとり、この合意実施を
推進させ、全ての緊急問題を解決し、
人民セミナーと和解の監督を行う。
また、同委参加勢力は、これらの勢
い地位とり決め問題に關し、レバ
ノン政府と接觸、交渉する方向が
明らかにされた。

四、アラファート議長顧問のハニ・ハ
サンのクウェート工作(六月一六
日)
クウェート元首との会談後、同
氏が語るには、
④ ブダペスト会議
政治的バカさを示している。
理性的政策ではない。現在は、
アラブ間関係への対応が第一な
のに。
⑤ エジプト関係
ここ数日中に、エジプトがP L
Oに対し、どのような反応を示
すか、それを見守っている。
⑥ ヨルダン関係
ヨルダン政府とのコンタクトは
いつも続いている。
⑦ シリア関係
新しい発展はない。
⑧ 国際会議年内開催説について
日付を決めるのは、むずかしい
だろう。重大な進展はあるが。
数日中に、PLO執行委員会が

PLOおよびアラ
ファト派の動き

資料④

として、カイロ協定破棄後の新し
い地位とり決め問題に關し、レバ
ノン政府と接觸、交渉する方向が
明らかにされた。五、アラファート議長顧問のハニ・ハ
サンのクウェート工作(六月一六
日)
クウェート元首との会談後、同
氏が語るには、L Oは、パレスチナの大義を放棄
しておらず、暴力放棄もしていな
いことを確認したこと。二、イスラエル進歩勢力代表団との
ブダペスト会議に、代表団派遣。六月八日～六月一二日
六月八日～六月一二日
三、バグダッドにてPLO執行委員
会

定期会議を行い、国際会議問題
を中心に討議することになるだろ
う。

* 五月中旬のクウェート紙によれ
ば、PNCメンバー(匿名)談と

して、「近日中に、PLO代表が
アンマン訪問予定。ハニ・ハサン
かスーラニが行くだろう。そして、
ムバラク大統領首席顧問のアル・
バズがこのPLO代表に同行する
だろう」と伝えていた。

実際にハニ・ハサンがアンマン
訪問したのは七月上旬。さらに、
それに先立ち、エジプトへも特使
(駐カイロPLO事務所代表)派
遣した。——編注

実際にハニ・ハサンがアンマン
訪問したのは七月上旬。さらに、
それに先立ち、エジプトへも特使
(駐カイロPLO事務所代表)派
遣した。——編注

五、PLO政治局長が訪ソし、ソ連
外相と会談。六月二二日
会議後の共同声明の主旨は、
① PLO参加の国際会議を
② テロリズム反対
③ アラファート議長の訪ソ
(日時は未確定)

五、PLO政治局長が訪ソし、ソ連
外相と会談。六月二二日
会議後の共同声明の主旨は、
① PLO参加の国際会議を
② テロリズム反対
③ アラファート議長の訪ソ
(日時は未確定)



資料⑤

カイロ協定(抄)

一九六九年一月三日

定期会議を行い、国際会議問題
を中心に討議することになるだろ
う。

レバノンとパレスチナ革命の関係
は、兄弟愛と共通の運命を基礎に、
かつレバノンの主権と安全枠内にお
いて、レバノンとパレスチナ革命の
利益のため、常に信頼と率直さそ
して積極的協力に基づくべきものであ
る。両代表団は、以下の原則および
手段で合意した。

パレスチナ人の存在
レバノンにおけるパレスチナ人の
存在は、以下の事項を基礎にすべき
であるということで合意した。

① 現在レバノンに住むパレスチナ
人の労働、居住、および自由な移動
の権利。

② パレスチナ闘争司令部・地方當
局と協力し、かつ良好な関係を保証
するために、コマンド・センターの
存在。これらのセンターは、レバノ
ンの安全とパレスチナ革命の利益双
方を考慮して、キャンプ内で武器
の携行および規制の諸取決めを取扱
う。

③ パレスチナ闘争司令部・地方當
局と協力し、かつ良好な関係を保証
するために、コマンド・センターの
存在。これらのセンターは、レバノ
ンの安全とパレスチナ革命の利益双
方を考慮して、キャンプ内で武器
の携行および規制の諸取決めを取扱
う。

④ レバノン内のパレスチナ人居住
地の治安維持計画、または大ペイ
ルートもしくは他の地域の治安維持
計画、または他の計画を提起した時
には、ペイルートキャンプは他のレバ
ノンの地域と同じように扱われるし、
パレスチナ人もレバノン人と同じ
法・各处置が適用される。

(一〇) L N D F・アマル・P N S
Fは三者の民族的闘争確立、武闘を
含むあらゆる、多種多様の闘争形態
をもって共同闘争を持続させ、パレ
スチナ解放をめざすパレスチナ革命
を支持するべく、三者間の同盟確立、
連携強化へむけたプログラムを作り、
それをシリアの監督下におく。

(一一) レバノン・パレスチナの民
族勢力は、アサド大統領指導下のシ
リアとの同盟が、帝国主義、シオニ
スト、反動共の陰謀と対峙する上で
重要であることを強調する。なぜな
がら、反帝、反シオニスト、反反動の
中東・アラブ世界において、シリア
が主勢力として民族主義・進歩路線
を堅持しているからである。

(一二) L N D Fとアマルは、P L
Oを自ら宣言した政治路線に立ち帰
らせるまで、P N S Fをレバノンに
おけるパレスチナ人の政治指導部と
して認める。

(一三) L N D Fとアマルは、レバ
ノンにおけるパレスチナ人同朋に適
当な対処を保証し、パレスチナ人が

民族的目的を達成し、祖国に帰還するの日まで、他のアラブ諸国、たとえばシリアにおけると同じようなより良い生活条件を与えるよう組織する。

①ジュンブラット、シリアへ。ドル
ーズーシリアの和解へ。
②大統領官邸五〇〇メートル先に臼
砲着弾。

- 乱派は非難)。
エルサレム市議選に立候補を表明したハンナ・シリオラは PLO の非難を受けて立候補を凍結。イスラエル

S Pは、一人のP S Pメンバーをシリア当局に爆弾事件関連でひきわたした。P S Pの元保安長官ジャマル・カララ（アブ・ハイサム）もその中に入っている」

- ・シャミル、国連事務次官ゴーリングと会見。「国連会議には反対。ペレスの意見は政府見解ではない」と発言。
- ・シャミル、アフリカ四カ国歴訪開始。
- ・シリア
- ・イランの経済相、シリア訪問（イラン首相も近く、ダマス入りとの観測も）。
- ・アルジエリア
- ・イスラム過激派裁判開かれる。
- ・ガルフ戦
- ・シリア、日本、ソ連の各外相、イランを訪問中。
- ・イラン首相、トルコ訪問。

六月一五日（月）

イスラエル

- ・オラシダ外相、イスラエル訪問を開始（一八日まで滞在）。
- ・西岸で、イスラエル車に手榴弾が投げられる。付近に外出禁止令発令される。
- ・ガルフ戦
- ・イラク外相、イランが停戦を受け入れるようにイランに圧力をかけることを国連安保理に要請。

- 戰艦援軍派遣を決定。
トルコ
- 米帝の過剰兵器部品第一陣到着。
ファンтом四機を含む計三億ドル
の一部。
- 六月一七日（水）
- レバノン
- イスラエル機、今年一七回目の空爆をサイイダの二カ所に。一カ所はハジビッラーの指令部、もう一カ所はアイネヘルワキャンプのP.F.L.P・G.C派の建物とされている
- カラミ首相暗殺に関連して、首相代行のホスは、軍の肅清を要求。
- P.S.P党首ワリド・ジュンブラットに対する暗殺未遂事件があつたとU.A.Eの「インティハイド」紙が報道。
- シリアの仲介で、ジュンブラット、ベリが和解。その共同声明は「①一週間以内に統一解放戦線を形成する、②カイロ協定破棄後は、ダマスカス六・一合意に基づいてレバノン・パレスチナ関係を規定する、③対イスラエル占領に対し、共同作戦室を設置する」というもの。
- フランジエがスンニ派代表と会談、ジェマイエル大統領とL.F.のジャ

- ・元米ABC記者チャールズ・グラス、国防相の息子アリ・オセイランがベイルート郊外で誘拐される。
- ・イスラエル
- ・PLOと接触したイスラエル人の裁判開始。
- ・イスラエル共産党、訪中予定。
- ガルフ戦
- ・UAEでイランとの和解をめざしていたシャルジャ元首が兄弟にクーデターで追われる。
- ・七月初頭から、クウェートタンカー防衛のために八隻の艦隊で行う予定と発表。
- ・イラン首相、トルコ訪問をおえて帰国。
- エジプト
- ・カイロでサウジアラビア展開始(サウジアラビアがアラブ界で初の同展覧会をエジプトで行つたことに注目)。
- 西独
- ・ハマディの米国へのひきわたしをしないことを決定。
- 六月一八日(木)
- レバノン
- ・米政府、チャールズ・グラスの誘拐を非難。

- フセイン・フセイニ、国会議長任務を再開。
- 南レバノン、ハスバヤ近くで、三人のゲリラを殺したとイスラエル発表（イスラエルの国防相・ラビンは「ここ二年間にイスラエル兵一六人、S L A 兵七人が死亡したが、『セキュリティゾーン』の有効性を強調）。
- イスラエル
- ローマ法王が、ワルトハイムとの会見を決めたことを非難。
- ヨルダン
- 非常事態法に基づき、ヨルダン作家会議（三〇〇人がメンバー）を非合法化。
- ガルフ戦
- イラン発表「北部・南部両戦線で、イラクを攻撃。二五〇〇人をせん滅した」
- イラン「アルゼンチンから原子炉を買っていない」
- イラン幹部、シリアで「シリア・イラク関係改善はウソだ」と一蹴。
- ソ連副外相、イラクを出発（イラク訪問前には、イラクを訪問していた）。
- 西独
- 西独内相、モロッコを三日間公式訪問。「テロ」麻薬問題討議。

1987年8月31日 第26号 月刊 由東レポート

<p>激動の中東</p> <p>ドキュメント</p>	<p>一九八七年六月九日</p> <p>～七月一〇日</p>	<p>六月九日（火）</p>
<p>● ベルギー外相インタビュー発表。</p> <p>「ガルフの危険な情勢につき、七月二二日にＥＣ－ＧＣＣ会議で検討したい」</p>	<p>六月一〇日（水）</p>	<p>六月九日（火）</p>
<p>● カラミ首相暗殺事件</p>	<p>六月一〇日（水）</p>	<p>六月九日（火）</p>
<p>レバノン</p>	<p>六月九日（火）</p>	<p>六月九日（火）</p>

- トヘイシア・キャンプ襲撃問題
イスラエル軍がキャンプを手入れ
パレスチナ人三人を逮捕。
- イスラエル
- 共産党国會議員率いる代表団がブ
ダペストへ。PLO代表団との会
議のため。
- 六月一日(木)
- レバノン・シリア
- フランジエ元大統領、シリア訪問
- 反アミン・ジェマイエルでの共同
をイスラム指導者たち確認。
- PLO
- ハンガリーのブダペストで、PLL
O代表とイスラエル内進歩派（共
産党国會議員を含む）が会合（リ
クードは、「参加者を裁判にかける
べき」と非難。パレスチナ側もフ
アタハ革命評議会派、ファタハ叛

- 米帝
・米下院、対サウジアラビア、ミサ
イル売却反対決議を採択。
- NATO外相会議、ダブル・ゼロ
オプション支持を決定。
- 西岸ヘブロン市近くのドヘイシャ
のうち七人を釈放。
- イスラエル司法相「ブダペストで
PLOと会合した左翼ユダヤ人を
警察は尋問すべき」と発言。
- 西ベイルートのシリア筋の発表「P
レバノン

●南部レノン「セキニリテ・ソーン」で、IRF（イスラム・レジスタンス戦線）がSLAとイスラエル軍を攻撃。イスラエルは報復として、ティーズリン、ヤーダ等四カ村爆撃。

日帝

●中曾根「イランへの倉成外相の派遣につづき、イラクへも特使を派遣したい」

●倉成外相モロッコのハッサンⅡ世会談。

米帝

●スターク号被弾についての議会報告書が発表される。米軍側、イラク側双方のズサンさ、怠慢さを指摘している。

六月一四日（日）

イスラエル

- 米下院、対サウジアラビア、ミサイル売却反対決議を採択。
N A T O
- 六月一二日（金）
イスラエル
- 西岸ヘブロン市近くのドヘイシャ
・キヤンプを攻撃した右翼一二人
のうち七人を釈放。
- イスラエル司法相「ブダペストで
P L Oと会合した左翼ユダヤ人を
警察は尋問すべき」と発言。
レバノン
- 西ベイルートのシリアル筋の発表「P
L Oと会合した左翼ユダヤ人を
警察は尋問すべき」と発言。
レバノン
- ジャ、これに反対を表明。
- 元米A B C記者チャールズ・グラ
ス、国防相の息子アリ・オセイラ
ンがベイルート南郊外で誘拐され
る。
- イスラエル
ガルフ戦
・ P L Oと接触したイスラエル人の
裁判開始。
- イスラエル共産党、訪中予定。
- エジプト
ガルフ戦
・ U A Eでイランとの和解をめざし
ていたシャルジャ元首が兄弟にク
ーデターで追われる。
・ 七月初頭から、クウェートタンカ
ー防衛のために八隻の艦隊で行う
予定と発表。
- イラン首相、トルコ訪問をおえて
帰国。
- エジプト
ガルフ戦
・ カairoでサウジアラビア展開始（サ
ウジアラビアがアラブ界で初の同
展覧会をエジプトで行ったことに
注目）。
- ハマディの米国へのひきわたしを
しないことを決定。
西独
レバノン

- 中曾根「イランへの倉成外相の派遣につづき、イラクへも特使を派遣したい」
- 倉成外相—モロッコのハッサンⅡ世会談。
- 米帝
- スターキ号被弾についての議会報告書が発表される。米軍側、イラク側双方のズサンさ、怠慢さを指摘している。
- 六月一四日（日）
イスラエル
- フセイン・フセイニ、国会議長任務を再開。
- 南レバノン、ハスバヤ近くで、三人のゲリラを殺したとイスラエル発表（イスラエルの国防相・ラビンは「ここ二年間にイスラエル兵一六人、SLA兵七六人が死亡したが、『セキュリティゾーン』の有効性を強調）。
- イスラエル
- ローマ法王が、ワルトハイムとの会見を決めたことを非難。ヨルダン
- 非常事態法に基づき、ヨルダン作家会議（三〇〇人がメンバー）を非合法化。
- ガルフ戦
- イラン発表「北部・南部両戦線で、イラクを攻撃。二五〇〇人をせん滅した」
- イラン「アルゼンチンから原子炉を買っていない」
- イラン幹部、シリアで「シリア・イラク関係改善はウソだ」と一蹴。
- ソ連副外相、イラクを出発（イラク訪問前には、イランを訪問していた）。
- 西独
- 西独内相、モロッコを三日間公式訪問。「テロ」麻薬問題討議。

六月一九日(金) レバノン

・オセイラン国防相「ハジビッラーがやつたと聞いている。釈放には楽観的である」

ガルフ戦

・U A E、シャルジャのクーデター終了へむかう。三日間で、追われた方はアブダビへ（経済運営の過ちをクーデターの理由にしているが、真相は、米帝のガルフ戦介入に反対する元元首と、賛成する元元首兄弟との紛争）。

六月二〇日(土) レバノン

・アサド大統領「チャールズ・グラスらの誘拐について全力尽して捜査せよ」と指示。

六月二一 日(日) レバノン

・駐レバノン、シリア軍保安長官、ガジ・カナーンが、シーア派、ファドーラ師と会合。

ガルフ戦

・サウジアラビア、ガルフ南部にA W A C S配備を決定（米の要請を受諾）。

・イラク機、イランタンカー、カーブ島を爆撃。

六月二二日(月) レバノン

・南部レジスタンス

・U A E、シャルジャのクーデター終了へむかう。三日間で、追われた方はアブダビへ（経済運営の過ちをクーデターの理由にしているが、真相は、米帝のガルフ戦介入に反対する元元首と、賛成する元元首兄弟との紛争）。

六月二〇日(土) レバノン

・アサド大統領「チャールズ・グラスらの誘拐について全力尽して捜査せよ」と指示。

六月二一 日(日) レバノン

・駐レバノン、シリア軍保安長官、ガジ・カナーンが、シーア派、ファドーラ師と会合。

ガルフ戦

・サウジアラビア、ガルフ南部にA W A C S配備を決定（米の要請を受諾）。

・イラク機、イランタンカー、カーブ島を爆撃。

六月二二日(月) レバノン

・南部レジスタンス

L F声明「一年間のシリア軍のレバノンへの展開は、治安混乱を生んだだけ。全外国軍隊撤退を要求する」

イスラエル

・国際会議問題

ペレスーサツチャード会談。サツチャード、国際会議支持を表明。

・シャミルのアフリカ歴訪

ケニア訪問。ケニア側は、イスラエルとの復交は拒否。

I C O（イスラム諸国会議）

・ジュネーブで反テロセミナー。イスラエル、南ア等に対する民族解放闘争の正当性を認める一方、世界レベルであらゆる形態のテロを防止するための国際会議（国連主導）開催を提案。

ガルフ戦

・E C I G C C会議。ガルフ戦停戦問題、G C C石化製品の対E C市場無関税輸出割当量の問題を討議。

・国務相（外務担当）、ガルフ戦問題、アラブ和解工作にむけ、ヨルダン訪問。二四日には、ダマスカスへ行つた。

六月二四日(水) レバノン

・南部レジスタンス

サイカの軍事指導者が、サイダー・ジャジーン間で殺される（対イスラエル・レジスタンス内部で、イスラム系、シリア系、パレスチナ組織間、複雑な利害対立から、味方内抗争を利用したサポートージュふえている）。

人質問題

①ペリ「本日の昼には、グラス記者、一緒に誘拐されたレバノン人二人が釈放されるだろう」と語る。

②オセイラン国防相、誘拐問題でのハジビッラー非難を否定。

③シリア軍、「オセイランの息子だけは釈放する」とする誘拐グループの提案拒否。シリアは「全員（三人）の即時釈放」を要求。

六月二二日(月) レバノン

①アラファト議長、バグダッドでフレイイン大統領と会見。

②P F L P、エルサレム市議会選挙出馬表明を行ったハンナ・シニオラの車焼きうちの責任を発表。「エルサレムは、（建国すべき）パレスチナの首都であり、これを勝手に変更させない」

六月二三日(火) リビア

・大学での演説で、カダフィ議長は、「アラブは核を持つべき」と発言。

トルコ

・トルコのクルド労働党の軍事組織である、クルド人民解放軍が村を襲い、三〇人を殺した」とされる。トルコ新聞、マスコミは、先に欧州議会がトルコ人によるアルメニア人虐殺非難決議したことが事件の背景にあると論評。

ガルフ戦

・イランは、北部での二〇日の夜から攻撃で、イラクの戦闘機二機を撃墜し、イラク軍三五〇〇人をせん滅したと発表。

六月二四日(水) イスラエル

・シリア軍保安長官、「最高の努力をしている」と、グラス記者釈放にむけた努力を表明。

・英大使、人質の一部がベガード部がイランへ移送されたとの報道に関する確認を、レバノン外相代理に要請。

六月二五日(木) レバノン

・南部レジスタンス

・人質問題

①P L Oのボン代表によると、ハマディの対米引渡しをせぬよう西独政府に忠告したこと。また、西独人質二名は釈放されるだろうと語る。

六月二二日(月) レバノン

・人質問題

①グラス記者問題

・人質問題

②西独政府、「レバノンの西独人々の安否に關わるので、米政府から引渡し要求を拒否する」

・ベリ法務大臣は、カラミ暗殺に關わることで、了承。

六月二三日(火) イスラエル

・人質問題

①イスラエル・レジスタンスを集結。

ガルフ戦

・米帝のガルフ艦隊に、増援船三隻。

六月二四日(水) レバノン

・ヨルダン

・フェイイン国王、シリア訪問。イラク・シリア和解工作のためとされ

・南部レジスタンス

六月一九日(金) レバノン

・オセイラン国防相「ハジビッラーがやつたと聞いている。釈放には楽観的である」

ガルフ戦

・U A E、シャルジャのクーデター終了へむかう。三日間で、追われた方はアブダビへ（経済運営の過ちをクーデターの理由にしているが、真相は、米帝のガルフ戦介入に反対する元元首と、賛成する元元首兄弟との紛争）。

六月二〇日(土) レバノン

・アサド大統領「チャールズ・グラスらの誘拐について全力尽して捜査せよ」と指示。

六月二一 日(日) レバノン

・駐レバノン、シリア軍保安長官、ガジ・カナーンが、シーア派、ファドーラ師と会合。

ガルフ戦

・サウジアラビア、ガルフ南部にA W A C S配備を決定（米の要請を受諾）。

・イラク機、イランタンカー、カーブ島を爆撃。

六月二二日(月) レバノン

・南部レジスタンス

L F声明「一年間のシリア軍のレバノンへの展開は、治安混乱を生んだだけ。全外国軍隊撤退を要求する」

イスラエル

・国際会議問題

ペレスーサツチャード会談。サツチャード、国際会議支持を表明。

・シャミルのアフリカ歴訪

ケニア訪問。ケニア側は、イスラエルとの復交は拒否。

I C O（イスラム諸国会議）

・ジュネーブで反テロセミナー。イスラエル、南ア等に対する民族解放闘争の正当性を認める一方、世界レベルであらゆる形態のテロを防止するための国際会議（国連主導）開催を提案。

ガルフ戦

・E C I G C C会議。ガルフ戦停戦問題、G C C石化製品の対E C市場無関税輸出割当量の問題を討議。

・国務相（外務担当）、ガルフ戦問題、アラブ和解工作にむけ、ヨルダン訪問。二四日には、ダマスカスへ行つた。

六月二四日(水) レバノン

・ヨルダン

・フェイイン国王、シリア訪問。イラク・シリア和解工作のためとされ

・南部レジスタンス

六月一九日(金) レバノン

・オセイラン国防相「ハジビッラーがやつたと聞いている。釈放には楽観的である」

ガルフ戦

・U A E、シャルジャのクーデター終了へむかう。三日間で、追われた方はアブダビへ（経済運営の過ちをクーデターの理由にしているが、真相は、米帝のガルフ戦介入に反対する元元首と、賛成する元元首兄弟との紛争）。

六月二〇日(土) レバノン

・アサド大統領「チャールズ・グラスらの誘拐について全力尽して捜査せよ」と指示。

六月二一 日(日) レバノン

・駐レバノン、シリア軍保安長官、ガジ・カナーンが、シーア派、ファドーラ師と会合。

ガルフ戦

・サウジアラビア、ガルフ南部にA W A C S配備を決定（米の要請を受諾）。

・イラク機、イランタンカー、カーブ島を爆撃。

六月二二日(月) レバノン

・南部レジスタンス

・人質問題

①P L Oのボン代表によると、ハマディの対米引渡しをせぬよう西独政府に忠告したこと。また、西独人質二名は釈放されるだろうと語る。

六月二三日(火) イスラエル

・シリア軍保安長官、「最高の努力をしている」と、グラス記者釈放にむけた努力を表明。

・英大使、人質の一部がベガード部がイランへ移送されたとの報道に關する確認を、レバノン外相代理に要請。

六月二四日(水) レバノン

・南部レジスタンス

・人質問題

①イスラエル・レジスタンスを集結。

ガルフ戦

・米帝のガルフ艦隊に、増援船三隻。

六月二四日(水) レバノン

・ヨルダン

・フェイイン国王、シリア訪問。イラク・シリア和解工作のためとされ

・南部レジスタンス

六月一九日(金) レバノン

・オセイラン国防相「ハジビッラーがやつたと聞いている。釈放には楽観的である」

ガルフ戦

・U A E、シャルジャのクーデター終了へむかう。三日間で、追われた方はアブダビへ（経済運営の過ちをクーデターの理由にしているが、真相は、米帝のガルフ戦介入に反対する元元首と、賛成する元元首兄弟との紛争）。

六月二〇日(土) レバノン

・アサド大統領「チャールズ・グラスらの誘拐について全力尽して捜査せよ」と指示。

六月二一 日(日) レバノン

・駐レバノン、シリア軍保安長官、ガジ・カナーンが、シーア派、ファドーラ師と会合。

ガルフ戦

・サウジアラビア、ガルフ南部にA W A C S配備を決定（米の要請を受諾）。

・イラク機、イランタンカー、カーブ島を爆撃。

六月二二日(月) レバノン

・南部レジスタンス

・人質問題

①P L Oのボン代表によると、ハマディの対米引渡しをせぬよう西独政府に忠告したこと。また、西独人質二名は釈放されるだろうと語る。

六月二三日(火) イスラエル

・シリア軍保安長官、「最高の努力をしている」と、グラス記者釈放にむけた努力を表明。

・英大使、人質の一部がベガード部がイランへ移送されたとの報道に關する確認を、レバノン外相代理に要請。

六月二四日(水) レバノン

・南部レジスタンス

・人質問題

①イスラエル・レジスタンスを集結。

ガルフ戦

・米帝のガルフ艦隊に、増援船三隻。

六月二四日(水) レバノン

・ヨルダン

・フェイイン国王、シリア訪問。イラク・シリア和解工作のためとされ

・南部レジスタンス

- 人質問題 レバノン
　　ハジビッラーが、シリアの交通妨害は根拠ないと批判。
　　・ 再建
- ① 西ベイルートで、シリア軍進駐以来（二月）一四五回めの爆弾。
　　(口) 南部でのアマル対パレスチナ勢力の衝突。
　　アマルが、ラシャディエ・キャンプにおけるパレスチナ人大量逮捕の報道を否定。「女性一名が捕えられただけ」
- イスラエル
　　・ イスラエル共産党が、訪中。中国は、「党レベルの関係。イスラエルが六七年戦争の占領地から撤退しない限り、国交樹立はしない」
- 七月三日（金）
　　レバノン
　　・ ハジビッラー、米帝のレバノン問題介入に対し、米施設その他への破壊攻撃で応える、と宣言。
　　・ イスラエル機、ベカーを空爆。
　　・ カラミ首相暗殺事件について、軍人に捜査の的がしばられてきた。
　　・ 南部で、「SLA」はアクララングで海路から誘拐作戦を試みたゲリラ二人を殺害。サイカとSSN Pの合同作戦。

- ・イスラエル
- ・ラビン国防相は、ワインバーガー米国防長官と会った後、レビ機製造計画について、最終結論出す時期にきたと発言。
- ・ラビン国防相は、米帝は、ハジビッラーのベースを襲撃して、人質を釈放すべきと語る。
- ・シャミル首相、米帝に、イスラエル内政に干渉しないよう警告。
- ・アマル対パレスチナ勢力衝突
- ・南部スール市近郊の村々で、アマルがパレスチナ人五〇人以上を逮捕。六月二十四日に殺されたシリア派のレバノン軍情報将校殺害事件関連とされる。逮捕されたのは、主にPFLP関連者とされる。
- ・アカバで、フセイン王とクルト・ワルトハイム最後の討議。
- ・国連大使は、ワルトハイム批判。ガルフ戦
- ・イラン、対仏関係をさらに悪化させる。

- 人質問題
- クウェート紙によれば、テリー・ウェイトは心臓麻痺で死亡した。
- サイダ上空をイスラエル機が偵察
- ラシャディエ・キャンプをアマルが攻撃。
- シリヤ
- ヨルダン首相リファイ、ダマスカス訪問。
- エジプト
- 訪問中のルーマニア首相と、中東国際和平会議へのPLOの参加支持を共同声明で発表。
- パレスチナ
- PLO、被占領地内で爆破闘争。
- 七月六日（月）
- レバノン
- サイダで、パレスチナ人とアマルの戦闘。
- 人質問題
- クウェート紙、「テリー・ウェイト氏の自然死」を報道。
- 再建
- 南部でのアマル対パレスチナ勢力の衝突。
- 本日、戦闘あり。
- ヨルダン
- VOAによるとフセイン王は、シリアのアサド大統領とイラクのフセイン大統領の会談実現のために

走りまわっている。

ガルフ戦争

- イラン国会議長、「米帝のクウェート・タンカー護衛は大きな失敗である」と語る。
- 米帝
- 米特使ウォルターズをダマスカスへ派遣。
- レイキヤビク・サミットでの合意に基づき、米国務省北アフリカネーブで、ソ連外務省中東局長との会談。明日まで二日間。
- 七月七日（火）
- レバノン
- 南部レジスタンス
- アマル＝ハジビッラー合同で、「キュリティゾーン」でイスラエル軍攻撃。
- 人質問題
- ① ベイルートの外国通信社は、チヘルズ・グラスの VTR テープを入手。その中で、グラスは、自己は CIA のエージェントである、と語る。
- ② クウェートのアル・アンバ紙によれば、テリー・ウェイトは殺され、テリ・ウェイトは殺された。
- カラミ首相暗殺事件

- 国務省が、シリアへのレーガン親書を送った件、近く米特使派遣の予定を発表（資料参照）。
- イスラエル
- 反イスラエル・レジスタンス
- イスラエル警察、テルアビブで、「テロリスト」容疑の五人を逮捕
- 反ギリシア・キャンペーン
- フラタハ革命評議会派（アブ・ニダル派）（リーダーのアブ・ニダルとギリシア政府が裏取引をしたというキャンペーン開始。以降、米帝対ギリシア政府の対立深まる）
- ギリシア政府は、「言いがかりの撤回なくば、在ギリシア米軍基地使用合意更新しない」と反撃。

④西岸のベツレヘムでも昨夜イスラエル兵への襲撃があった。

ガルフ戦

- ・イランが、タンカー二隻砲撃。また、北部戦線では二つの丘奪取とリ等の艦艇配備を決定。
- ・米帝、ホルムズ海峡外に、ミズーリ等の艦艇配備を決定。

六月二八日（日）

P L O

- ・訪ソ中のP L O代表団（団長はカドゥミ政治局長）とソ連が共同声明。主旨は、P L O参加の中東和平国際会議開催のよびかけ、あらゆるテロへの反対、アラファート議長の訪ソ（日時、未決定）。

六月二九日（月）

レバノン

- ・人質問題

ペイルート南郊のハジビッラー区への出入りも、シリア軍がコントロール開始。同地区は、終日コーンランを放送していたが、これも礼拝時間のみになつた。

英帝

- ・先のE C会議で、対シリア制裁緩和

なるまで、関係改善しない」と外務省筋。一三日のコペンハーゲンでのE.C.外相会議で結論が出るみごみ。

六月三〇日（火）

レバノン

- ・南部レジスタンス
- イスラエル放送、シリアが南部への圧力拡大を行っていると伝える
- ・人質問題
- 各指導勢力がグラス記者誘拐問題を機に、人質作戦を批判し出しているのに対し、ハジビッラーが反論。「イスラエルによるテロルこそを、問題にすべき」「誘拐者達を支持することは、反イスラエル闘争を支持することだ」
- ・シリア－米帝関係改善の動きへの反応
- ①ダニー・シャムーン「米国政府がレバノン問題解決に積極的なことを確認した。米－シリア接近は、地域レベル、とくにレバノン問題解決にとって良いことである」
②フランジエ「もし緊張が緩和すれば、レバノン－シリアの接近は可能

取り組み等、シリアの政策に、はつきりとした変更の徵がみえた。中東和平に、シリアの占める重要性は欠かせないと説明。

七月一日（水）

レバノン

・人質問題

シリアーレバノン国境通過のイラン系の人、車に対するシリアル側の禁止が伝えられる。

・英國教会特使のウェイト氏（一〇月に誘拐された）は、既に米人人質二名と共に、イランへ移送されたという説が流れる。

ガルフ戦争

・米帝、米国連大使のウォルター・ズをソ連へ派遣。国連安保理のガルフ戦停戦案にソ連の支持をとりけるためとされる。ウォルターズは、この後、中国、日本を回ること、シリアを訪問するだろうとされている。訪ソ目的を、イラン・イラク戦争で独自の役割を果たしたこと、外交的に思いきった手段とする必要があるとしている。

・ミ首相暗殺に関してレバノン軍を悪者にすることは許せないと語る。
 サイダでパレスチナ勢力がシーア派レバノン人一〇人を誘拐。スリでは、アマルがパレスチナ人を誘拐。

シリア
 ・ダマスカスで、アサド大統領とレバノンのイスラム諸派の指導者たち会談。カラミ首相暗殺に関して、その調査を妨害しているジエマイエル大統領とフランジストを批判。

スンニ系のレバノン紙によると、この会議は次のような合意に到るだろうとされる。

一、カラミ首相暗殺の黒幕および実行犯に懲刑を課す。

二、レバノン民族派区域での治安確立。

一、（LF主導の東ベイルート）「独立政府」樹立宣言構造へ対抗措置をとり、分割実体化に対峙。

一、ULF支持のための努力。

ULFこそ、現情勢下でのレバノンの統一、独立、アラブ的性格をかちとる「前衛」。（南部での）レバノン民族レジスタンス支持へあらゆる努

ミ首相暗殺に関してレバノン軍を悪者にすることは許せないと語る。うつ努力。
 シリア
 ・ウイーンのイラン大使館も、パリのイラン大使館と同様の活動をしていると閉鎖を要求。
 イスラエル
 ・レヴィ機問題について決定を再度延長。
 支店を更に三店開設。

米帝
 ・米特使ウォルターズは、シリアに、テロリストの関与を一切否定しない限り、国交正常化はありえないと強要。

PLO
 • アラブ連盟会長が、ダマスカス訪問。

イスラエル
 • 国際会議
 ①ペレス、本日ムバラクと会談。ジュネーブにて（ムバラクは、UNCTAD参加のため、すでに数日前に、ジュネーブ入りしている）。この後、ペレスは「中東和平は、中東の経済開発問題と一体のものとして進めるべき」と語る。
 ②シャミル曰く「中東和平国際会議への反対しているが、これは和平そのものに反対しているのではない。ヨルダンとの単独交渉によるべき」

七月九日（木）
 レバノン
 • 人質問題
 ①グラス記者問題
 「四八時間以内に、一〇〇〇万ドルの身代金支払い、イラクへの武器禁輸を行わないと処刑する」との警告。

七月一〇日（金）
 ガルフ戦争
 • ラフサンジャニ国會議長、「イラクが開戦責任を認めるなら、対話を始めても良い」と語る。

②西バールベックで、シリア軍がハジビッラー基地をロケット砲攻撃したとの報道。ベカーのザハラでは爆弾。
 • 再建
 ドルーズ、スンニ、アマル、シーア派リーダーがダマスカスで会合。また、アサド大統領とも個別会談。

〈月刊中東レポート最新主要論文〉

ICO第5回サミットと軍事緊張高める米帝－イスラエル	1987年2月10日
シリアのベイルート介入とICO以後の中東情勢	1987年3月10日
中東和平国際会議とPLO再統一	1987年4月10日
第18回PNCと中東情勢	1987年5月10日
ガルフの緊張を高める米帝の狙い	1987年6月10日
中東情勢の鍵を握るシリア	1987年7月10日

[月刊中東レポート26号(本号)は中近東情勢の反映のもと、原稿入手が遅れたため、発行が遅延いたしました。]